

動物たちは異変訴えた

明石市の南西約三キロの明石海峡。冷たい風が、小さなタコ釣り船を通り抜けていく。十六日午前十時、黒いジャンパーを着込んだ東明石浦漁協の漁師砂川義雄（五）は、深い緑がかった水面からタコつばを引き揚げようとして、この日何度目かの舌打ちをした。

タコを釣るには、タコつばを動かしてはいけない。そろりと引き揚げると、ポイントである。だが、つばとつばの間のロープが張り詰めている状態が前日から続いていた。底引き網を引いているような手ごたえなのである。当然、漁にはならない。

ロープには、十分ゆとりを持たしていた。海底が動くはずなどないのに――。たまに入っているタコつばでは、オスとメスがまるで抱き合っているようにしている。産卵期でもないのに、オスとメスが同じつばに入るなど奇妙な現象だった。「海が狂うとう」。五十年間の漁師生活でも初めての出来事だった。背筋が震えた。

神戸市須磨区の須磨海浜水族園。午後三時三十分からのイルカショーを前に、イルカライプ館は約千八百人の観客で満席だった。ブルーのジャージを着たイルカトレーナー滝澤博（三九）は、控えプールから冬のさえた陽光にきらめくシヨ

ープールにオス二頭とメス一頭を移した。

滝は、ギリシャ女神の衣装を着たドルフィーヌ吉田妃代江（三三）とともに舞台へ上がり、三頭のイルカにスタンバイの合図を送った。三頭が尾びれを使って水面に立ち、観客に胸びれを振ってあいさつをするはずだった。

ところが、メスが勝手に泳ぎ始め、プールサイドに身を乗り上げようとする。ソワソワして落ち着きがない。メスは和歌山県太地町の追い込み漁で捕獲され、推定年齢九歳。七頭のイルカのなかでは、もつとも繊細でイタズラ好きだった。

観客二人との握手でも、メスだけが寄り付かない。観客に水をはね飛ばす有り様だ。観客にシンバルを鳴らしてもらい前方宙返り、トライアングルの合図で回転しながら尾びれで水面歩行、タンパリンでは立ち泳ぎ。こんな見せ場でも、メスだけが演技をしない。

何度も何度も滝の足元にすり寄り、まるで水中から逃げるかのようにプールサイドに身を乗り上げる。こんなことは、シヨ一始まって以来だった。二頭のオスにもメスの行動が伝染した。トレーナーの一人久保信隆（二六）が、シシャモとサシマのエサを持ちプールサイドに駆け寄る。メスだけを分けようとしたが失敗し、結局、二十五分間のショーは混乱に終始

した。

岐阜大農学部獣医学科を出て、三年前からトレーナーを務める滝にとっても初めての体験だった。イルカの聴覚は人間よりはるかに優れている。水中を伝わる何か異常な振動をいち早く、キャッチしていたのか。

このころ、建設中の明石大橋の淡路島側ケーソン付近でも異常が発生していた。東明石浦漁協の岩瀬嗣夫（五二）は「海水が広い範囲で濁り、小魚の死がいがある。ここに浮かび上がった。ふだんは中層域にすむコノシロが、海面すれすれを泳いでいた」と証言する。

淡路島・北淡町のカントリーマイツ牧場（上野勝生支配人）。和牛百頭をはじめ、ラクダ、ヤギ、シカ、羊など約二百種類の動物がいる観光牧場だ。従業員の悩みは、倉庫に保管している動物の飼料を狙ってやってくるネズミのフンの後始末だった。一週間に一度掃除すると、ちり取りに山盛り二杯分にもなる。ところが、この一週間はほとんどフンがなかった。ネズミの姿が消えていた。

大阪市内の公園では、かつてないムクドリの大群が木々で叫び声をあげ、神戸市東灘区では夜になって犬がほえ、猫が鳴き続けた。動物たちは必死で何かを訴えようとしていた。だが、都会生活に慣れた人間には届かなかった。

この日午後六時二十八分、神戸で震度1（微震）の地震があった。震源は淡路島北東の明石海峡、深さは十五キロ。



日産ビル

1920年築の鉄筋6階建て。神戸市都計審が昨年「景観形成重要建築物」として保存の必要を訴えた（栄町通2、1月17日撮影）